

# 義足を変えてまた駆ける

## 短距離出場 瀬戸の大島選手

かつては生活用の義足で楕円球を追い、今は競技用義足で最速を競い合う。陸上男子短距離で東京パラリンピックに出場している大島健吾選手(三ツ子)名古屋学院大四年、愛知県瀬戸市



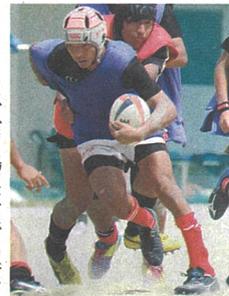
は高校時代、全国大会出場歴のあるラグビー部に所属。激しさあふれる他競技での経験を生かし、大舞台に挑んでいる。三ツ子の長男として生まれた時から、左足首から先がなかった。それでも弟や妹と変わらない生活を送り、瀬戸西高校ではラグビー部に入った。「勧誘が強引だったが、やってみると面白い」と接触プレーも多い競技に熱中。生活用の義足でスパイクをはき、土にまみれた。

正道範男監督(右)は「周りも置をつかんだが、聖地の花園」



陸上男子100m予選1組で5位となり、決勝進出を逃した大島健吾選手。8月29日、国立競技場で

## 高校でラグビー 経験生かす



ラグビー場にはたどり着けなかった。

大学では陸上部へ。高校時代に競技用義足の体験会に参加したことがあり、可能性を感じて転向した。「いろいろな動きができるようになるのが楽しい」。競技用独特の板バネを使う動きを少しずつ理解してタイムを短縮。新型コロナウイルス禍による東京パラリンピックの延期は競技経験の浅い大島選手の追い風となり、日本代表に入った。

初登場は八月二十九日、得意種目の100m(義足・機能障害T64)。予選で敗れ、決勝進出はならなかったが「楽しく走ることができた」。今月三日の混合400mユニバーサルリレーなど、さらに二種目に出場する可能性がある。「ラグビーをやり通した経験があるから、陸上をやっていい。悔しい気持ちがあるから今がある」。不規則に転がるボールのような道のりも、無駄ではなかったと信じて臨む。(吉岡雅幸)

※この記事・写真等は、中日新聞社の許諾を得て転載しています  
許諾番号:20210922-26650

(c) 中日新聞社 無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています